

# 随筆 エッセイ

## 奨励賞

### 慟哭

白松町 亀田 昇

先の戦争を知る八十路越え世代は、戦後七十年を経た今も尚、後世に託すべき『不戦』の願いを隠し持っている……と思う。是非とも掘り起こして頂きたいものだ。

記憶を辿れば、『あの日』も矢張り暑かった。昭和二十年八月十五日。昼少し前。

十四歳になったばかりの私は、旧国鉄小松駅近くに来た更地に、暫時立ち竦んでいた。それは、此処こそがその数か月前、

『駅周辺は敵機空襲の第一目標になる』

と言う、今では全く信じられないようなお達しのもと、まるで実際に爆撃を受けたかのように取り壊され強制疎開させられ

た、我が家を含む懐かしき家々の跡地だったからだ。

産まれ育って十余年。思い出いっぱい生家を、理不尽に失ってしまった多感な少年の気持って、分るかな……本当に悲しいものだよ。哭きたくなるくらい本当に。

思いを残しその場所を後にした私は、疎開先である母方の在所に向かうべく、尾小屋鉄道は新小松駅の待合室にいた。程なくしてあの時刻。何故か駅長さんからではなくて、家の近くに住いされ、何時お会いしても紳士然としていてどこか近寄りがたい雰囲気と漂わせていた社長さん直々に、三十人ばかり居合わせた私達乗客に向かって、静かな口調でこう告げられたことを記憶している。

「みなさん。御存知のように間もなく天皇陛下からの重大放送が始まりますので、ラジオの前にお集まりください。」

ところで、私にはこの社長さんに関わる、一つ鮮烈な思い出が残っていた。それはその何年前のこと。私とは少しばかり年上だが何度かお会いしたことのある楚々としたお嬢さんがおいでだった。だが可哀想にも、彼女は幽明境を異にされてしまったのである。

その日の夕方。一体何事が起ったのか、と驚いて人々が表に飛び出すぐらいの大声を張り上げ、人目も憚らず泣きながら街中を歩き回られている社長さんのお姿があった。常日頃物静かな印象ばかりが強かったゼントルマンだけに、この出来事は、幼かった私の脳裏に強烈に焼き付けられていた。これぞ極みの『慟哭』であろう。

間もなく車両の横に置かれたラジオから、激かな『君が代』奏楽に続いて、やや甲高い感じの陛下のお言葉が流れてきたのだが、お声が小さいのと、その間中「ザーザー」という雑音がひどく、私は勿論のことそこにいた誰もが殆ど御詔勅の内容を聞き取れなかったらしくて、お互い首を垂れたまま顔を見合わせていた。だが、列車の出発時刻も既に過ぎていたので、社長さんは怪訝な顔をしている我われの気持ちを追い払うかのように、

「皆さん。これは、きつと陛下がこれから先も一致団結してこの難局を切り抜けるように、と仰せられたのでしよう。」

と言って列車に乗り込むよう促された。

ところが、である。その頃失礼ながら『マツチ箱』と揶揄されていた車両に、三十分ばかりガタゴト揺られ、『S 駅』に

到着。何時もはのんびりしているプラットホームに降り立ったその途端、そこには、信じられない様な光景が繰り広げられていたのだ。

何と大の大人が五、六人、それこそ辺り構わず両手を振り回して泣き叫んでいるではないか。わが目を疑うとはこの事だろう。

確かこんな風に聞こえた。

「ウアーん・ウアーん。日本なあー、負けたがやとおー。降参したがやとおー。」

「うららあー、どおーしよおー・ほんにとどおーしよおー。ウオーん・ウオーん。」

これぞまさしく純朴な村人たちの『慟哭』である。

二つの慟哭は決して並列に並べることはできない。けれど、当時の日本国民だったら、国を失うと言うことは、わが身を引き裂かれたと同じ位に苦しみを感じる純粹さを享有していたことも分かってほしい。

幸せの原点は、家族の絆にこそ存在する、と信じていた私自身も、双子で産まれた長男を早くに亡くし慟哭し尽くした一人である。

……あれから至って七十年。

「国民の安全を守る上で、安全保障関連法案は絶対の必要だ」

と時の宰相は、やや強引に理解を求めて

いる。けれど、そのことに危惧感を抱く多くの識者や、とりわけ若者達までもが、反対の声を挙げている事実は看過できない。私達は、世界一平和な憲法の下にある。間違つて突つ走れば、またもや知らずしらずのうちに迷路に入り込むのでは……と、心底恐れている。

『国民総慟哭』の事態だけはどうしても、何とあつても避けなければ、駄目でしょう。

### 奨励賞

## 永遠のまほろば

京町 山本 和子

真夏の風が流れる。一服の清涼感とともに、懐かしさも運んできます。あの頃のこと鮮明に……。照りつける太陽の眩しさや、セミが発する大音響の鳴き声が、山あいの小さな村に響き渡ります。その村の戸数は八戸。温泉地の町からうねうねとした道を三キロ余り、通り道にはヒマワリや立葵、夏の色々な花が咲いています。

八歳の私は、母の手に引かれ、子供の足では気の遠くなるような道を歩き、たどついた大きな家は、庄屋であつた父の実家でした。百年はゆうに経つていると思われ日用杉がうつそうと繁り、日差しが閉ざされた庭の苔は、青々と一面を覆っています。「こんにちは！」子供の声に応じたかのように、本家の伯母さんが奥の部屋から顔を出します。ふつくらとした色白の丸顔をほころばせ「和ちゃんようきたね、暑かつたやろ、入るまっし」

傍にいた母は遠慮がちに「義姉さん、こんにちは突然お邪魔して申し訳ありませんね」「なんも、なんも、良いわいね。井戸で冷やしてある冷たい麦茶飲むまっし」玄関の広い土間の前には、大太鼓がつりさげられていて、緊急の時打ち鳴らすためと以前兄に聞いた覚えがあります。土間の中は薄暗く温度が外より数度低く感じられ、まるで避暑地に来たかのようにです。五十畳の部屋に二十畳の続きの部屋、縁側は長く続き、緑の濃淡で描いた天然のじゅうたんのような庭に面しています。部屋の片隅にすわつた母は、伯母さんがお茶を運んで来る間所在無げに、広い部屋を飛び回っている私を注意することなく、ただぼくと私を見えています。

「何もなければまあ、お茶をどうぞ」やさしく声をかける伯母さんに

「ちよっとお願いごとがあつて今日寄せてもろたんやわ」「なんやろね」

母のぼそぼそと話し出す声が、小さく聞こえます。私の聞いたのはここまでです。

「庭で遊んできまつし」という伯母さんの声で私は外に出て、ふかふかした苔を踏み太い日用杉の後ろで、一人かくれんぼをしていました。庭の縁には背の高いヒマワリが、私を見下ろすかのように咲いています。どれくらい時間がたつたのか、「もう帰るよ」と部屋から声をかける母に、遊び足りないふくれ面で、私は駆け寄りました。

「長いことおじゃましてしても」何度も頭を下げる母に「これ持つて行くまつし」と取れたての胡瓜、茄子、トマトなどを入れた包みを持たせてくれました。私は伯母さんに「さようなら」とあいさつをして、山の早い夕暮れの道を母と「夕焼け小焼け」の童謡を歌いながら家路に就きました。

あの日、母は本家の伯母さんに何をお願いしていたのかしらと、大きくなってから、思ったものです。子沢山の分家の我が家には、お願いがたくさんあつたはずです。しかし母は貧しくとも誇り高い人でした。本家に出かけねばならないことは何

よりの苦痛だったのに違いありません。

私の嬉しそうに遊んでいる姿は、母の心にどのように映っていたのでしょうか。

私たち兄妹が実家としていつも遊んでいた地。あの頃から何十年も経っているのに日用杉と苔の美しさは昔のままです。その地で駆け回り、苔の中に寝転んで夜は天の川を見ていました。日用川から湧き上がる無数のホタルの乱舞。そつと手を伸ばせば、その指に止まり優しい光を放っていました。そのホタルで思い出しました。

「苔の里 蛍飛び交う 日用川」 良子

平成二十一年、こまつ歌留多が作られた時伯母さんが詠んだこの句が、文字札（取り札）に取り上げられました。

歩いてしか町へ行き来できなかつたあの里山の村に、今マイカーや観光バスがやってくるようになりました。新聞、雑誌、外国の方々にと、各方面で取り上げられているようです。美しい自然が破壊されることなく、多くの方々に見てほしい気持ちもあります。遠い昔誰一人いないひつそりとした森の中で夢を見ていた、ひと時が懐かしい思い出として甦ります。

あの長い夏の日のことはいつまでも忘れません。太陽に向かって向きを変えるヒマワリ、暑い日差しに負けない生命力あふれ

る向日葵色が目に焼き付きます。今年の夏も、あの山里の村の庭にヒマワリが元気に咲いているでしょうか。

今は七戸となったそれぞれの家の庭にも色々の苔（杉苔、かもじ苔、はい苔、檜苔、うま杉苔、細白髪苔）が青青と生えています。叡智の里（日用苔の里）と名付けられたこの地が、いつまでも「永遠のまほろば」であつてほしいと私は願っています。

## 東北夏祭りと猫のこと

佐美町 坂上 和子

ここ十年来友達四人と年に一度旅行に出かけている。今までは日帰りか一泊が多かったが、孫守りも一段落し連泊も可能になったので、前から一度行つてみたいねと言っていた、東北の夏祭りに思い切つて出かけることにした。東北の五大夏祭りは有名だが、今回は秋田の竿燈と青森のねぶた祭りに決めた。祭りの日は毎年決まっていますが、八月初めの暑い盛りに行われる。四人共腰痛や膝痛を抱えているので移動の少ないバス旅行にした。平均寿命が延びたとは